OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	福島方言の問い返し疑問 ： イントネーションによる区別
Author(s)	白岩, 広行
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2011, 9, p. 14-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23212
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第9号（2011年1月）14-29

福島方言の問い返し疑問

―イントネーションによる区別―

白岩　広行

【キーワード】福島方言、問い返し、イントネーション、メタ言語、話法

【要旨】

本稿では、福島方言の問い返し疑問文が2種類のイントネーションパターンをとることを示し、音声的な特徴をふまえたうえで、イントネーションによる発話意図の違いを記述した。

2つのパターンのうち、(問い返し以外の)疑問文一般でも使用されるものを「疑問汎用型」、問い返しの場合にのみ使われるものを「問い返し専用型」とすると、両パターンの音声的特徴(2節)、基本的意味(3.2節)は次のようにまとめられる。

a.) 疑問汎用型(⁀↘↗)

音声的特徴：一語文の場合は文頭、複数の語からなる文の場合は述語部の開始点から始まって文末の手前までの間に高くなり、そのあと文末で一度下がってから上昇調をとる。

基本的意味：相手の発話そのものは理解したうえで、事実(現実世界のことがら)について改めて問い返していることを示す

b.) 問い返し専用型(＿↗)

音声的特徴：一語文の場合は文頭、複数の語からなる文の場合は述語部の開始点から、音が低いまま推移し、文末で上昇調をとる

基本的意味：相手の発話がそのままでは理解できず、相手の発した言語表現そのものについての、メタ言語的なレベルでの問い返しをおこなっていることを示す

上記の基本的意味に関連して、基本的に疑問汎用型の問い返し疑問文が間接話法的な性格を示すのに対し、問い返し専用型の問い返し疑問文は直接話法的な性格を示す(3.3節)。

1. はじめに

福島市を中心とした福島県県北地方の方言[1)]では、いわゆる「問い返し」をおこなう場合、そのイントネーションに2つのパターンが見られる。

(1) (AとBは友人どうし。Aが外から帰ってきた)

A：外、雨降ってきたよ。

B：え？　{アメ⁀↘↗／アメ＿↗}

上例に掲げたうち、⁀↘↗という記号で示したイントネーションは、「ア」の音が高く始まっ

1) 具体的には福島市・伊達市・伊達郡の方言を指す。菅野(1982)の区分では「信達方言」とされるが、「信達」という地域呼称が一般的でなく当該地域をイメージしにくいため、本稿では「福島方言」と呼ぶことにする。

て「メ」で一度下げてから上昇をするものである（図 1-1）[2]。一方の_↗は、「ア」が低く、文末の「メ」で上昇をするものである（図 1-2）。

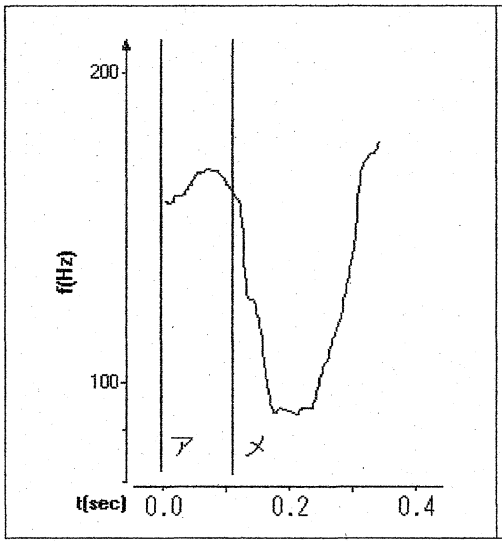

図 1-1　「アメ‿↘↗」の波形（疑問汎用型）

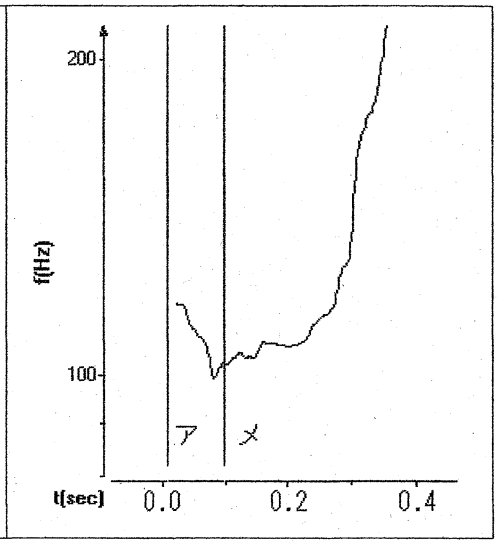

図 1-2　「アメ_↗」の波形（問い返し専用型）

福島方言はいわゆる無型アクセント方言であり、語に固定のアクセント型はない。したがって、このような音の上下動は「雨」か「飴」かというような語彙の区別にあずかるものではなく、別の意味づけをもって使い分けられているものと考えられる。

その使い分けに関して、下に端的な例を挙げる。両パターンは、(1) のように、いずれも問い返しの場面で使うことができるが、その発話意図は互いに異なっており、文脈に応じて使い分けられる（例文 (1) と同様、A と B は友人で、A が外から帰ってきたという場面）[3]。

(2) A：外、雨降ってきたよ。
　　B：{アメ‿↘↗／#アメ_↗}
　　　それにしては窓の外が明るいんじゃないか？

(3) (B は部屋で掃除機をかけている)
　　A：外、雨降ってきたよ。
　　B：{#アメ‿↘↗／アメ_↗}
　　　悪い。よく聞こえなかった。

---

2)　本稿の図に示す音声は、すべて筆者の読み上げによる。また、縦軸は対数目盛である。

3)　「アメ」という問い返しの発話と次の発話との間にポーズを入れると許容度が上がる場合もあるが、ポーズはないものとして発話の適切性を判断した。これは、ポーズによって文脈がリセットされる可能性があるためである。以下の例文でも、原則として問い返しの発話の後にポーズはないものとして考える。また、3.4 節で後述するように「意外さ」をアピールする場合も許容しやすくなるが、そのような「意外さ」の含みもないものとして考える。

(2) のように「雨が降っている」という事実そのものに対して疑念を抱く場合には前者のパターンが生起し、(3) のように「雨」と言ったかどうかの聞き取りを確認する場合は後者のパターンが生起する。

本稿では、この両パターンを比較し、音声的な違いをふまえたうえで、その意味的な使い分けのありかたを記述する。議論が前後することになるが、3.1 節で述べるとおり、前者のパターン（⁀↘↗）は問い返し以外の疑問文一般でも使われ、後者のパターン（_↗）は問い返しの場合にかぎって使われる。ここから、本稿では、前者を「疑問汎用型」、後者を「問い返し専用型」と名づけて議論を進める。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、2 節で両パターンの音声的な特徴について整理し、次の 3 節で意味面の記述をおこなう。4 節では「問い返し」と似た環境で生起する「情報把握」に関わるイントネーションについて簡単な補足をおこない、最後に 5 節でまとめとする。

なお、分析にあたっては当該方言を母方言とする筆者の内省を用いる[4)]。これは、両パターンが話し手の発話意図によって使い分けられるという特性上、実験的手法や談話からの分析にはおのずと限界があり、研究者自身の内省によるデータを用いないかぎり、分析が深まらないと考えるためである。

また、例文は、議論の焦点となる文末の一文節のみをカタカナ表記の方言形で示し、残りは共通語訳とする。方言の意味が取りにくいものについては、例文の後にカッコ書きで共通語訳を付した。その上で、非文は*、運用的に不適切な（意味的に文脈に合わない）文は#、不自然な文は?、かなり不自然な文は??をつけて示す。

2. 音声的な特徴

本節では、一語文の場合（2.1 節）、複数の語からなる文の場合（2.2 節）の順に、両パターンの音声的な特徴を概観する。

2.1. 一語文の場合

ここでは、まず一語文の場合について、両パターンの音声的な特徴を見る。

疑問汎用型（⁀↘↗）の場合、図 1-1 で示したとおり 2 拍語では文頭から高く始まるが、3 拍以上の語では、文頭は低く始まって文末から 2 拍目までの間に徐々に上昇するというパターンが見られる（図 2-1）。また、1 拍語の場合、例えば「ユ（湯）」が「ユー」のように、音が 2 拍に相当する程度にひきのばされて 2 拍語と同様のパターンが実現される（図 2-2）。つまり、「疑問汎用型」を音声的な面から決定づけているのは、文末よりひとつ前の拍まで

---

4) 筆者に関する情報は以下のとおり。
1982 年福島県保原町（現伊達市）生まれ。両親とも保原町出身。
居住歴—0-5 歳：福島県福島市　5-7 歳：同保原町　7-12 歳：同郡山市
12-14 歳：同白河市　14-18 歳：同福島市　18-28 歳（現在）：大阪府豊中市
このうち福島市と保原町が県北地方に含まれる（保原町は福島市のベッドタウン）。なお、生え抜きの同世代話者（友人等）の内省も参考にしたが、例文の最終的な文法性判断はすべて筆者による。

の間に音が高くなり、その後、文末で一度下降してから上昇するという上下動のあり方といえる。

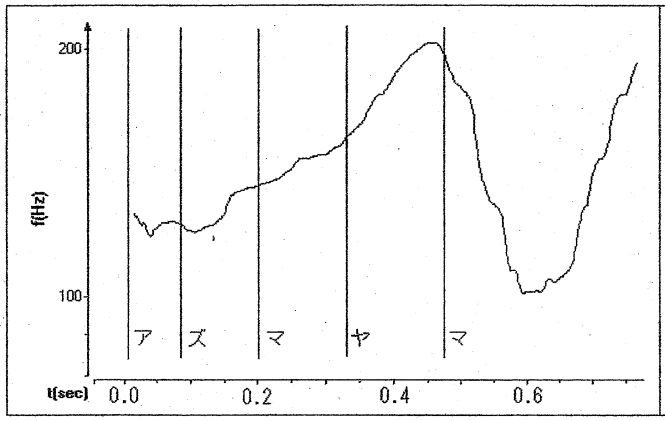

図 2-1　疑問汎用型の「アズマヤマ⁀↘↗」

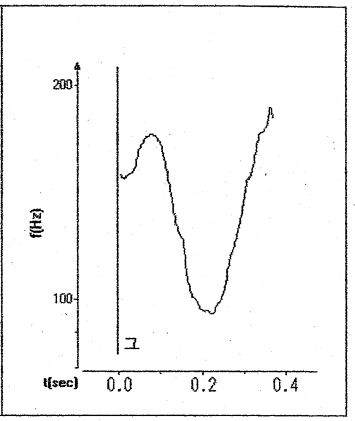

図 2-2　疑問汎用型の「ユ⁀↘↗」

一方、問い返し専用型（＿↗）の場合、拍数に関わらず文頭から低く始まって文末の手前まで低いまま推移し、文末で上昇する（図 3-1）。疑問汎用型と同様、1 拍語の場合は 2 拍に相当する程度に音がひきのばされる（図 3-2）。つまり、「問い返し専用型」を音声的な面から決定づけているのは、文末の手前までは低いままで、その後、文末で上昇するという上下動のあり方である。

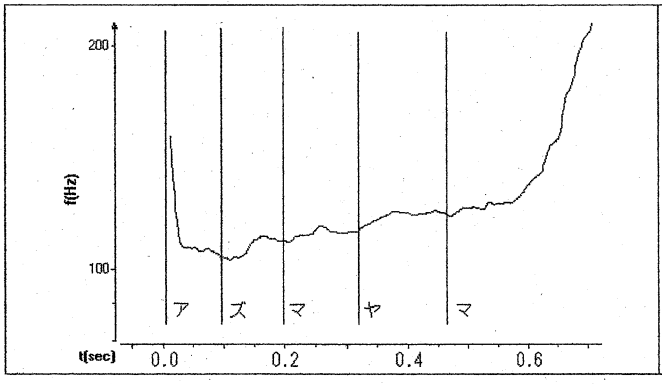

図 3-1　問い返し専用型の「アズマヤマ＿↗」

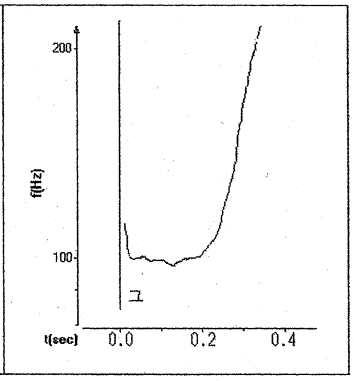

図 3-2　問い返し専用型の「ユ＿↗」

なお、ここにいう「文末」についてだが、特殊拍が含まれない場合は文末の 1 拍（＝1 音節）を指す。一方、文末の拍が特殊拍の場合、上記の「文末」で起こる音の上下動は「文末拍」単位で起こる場合と「文末音節」単位で起こる場合の両方が存在する。例えば「おばさん」という語の場合、各パターンで起こる文末での上下動は、「ン」の音から始まる場合（拍単位）と「サ」の音から始まる場合（音節単位）との両方が存在する。ただし、そ

の違いが次節以降で記述する意味的な特徴に関わることはなく、両者はいわば自由変異の関係にあると考えられる。そのため、本稿では「文末」という場合、「文末拍」と「文末音節」のどちらをも指すこととし、その違いについては捨象する。

また、ここで掲げた2パターン以外、例えば「アズマヤマ」と言う場合に「アは高く始まり、その後下降して文末で上昇する」「マまでは上昇し、そこから下降して文末で上昇する」のようなイントネーションも音声的には実現しうるが、(あくまで筆者の内省ではあるが) 通常の会話のなかで現れることはまれである。そして、もし現れたとしても、その文法的・語用論的ふるまいは次節以降で記述する「疑問汎用型」の場合と共通しており、「疑問汎用型」の特殊な変異の形と見なすことができる。そのため、この2パターン以外のイントネーションについては、本稿では特別な考慮に入れないこととする。

2.2. 複数の語からなる文の場合

ここでは、複数の語からなる文の場合について音声的な特徴を示す。複数の語からなる文の場合、2.1節で一語文の場合として見たイントネーションパターンは、図4に示すとおり、述語部分 (ヤンデル) にかぎって実現されることになる。

(4) A：外、雨やんでるよ。
　　B：外、雨 {ヤンデル‿↘↗／ヤンデル_↗}

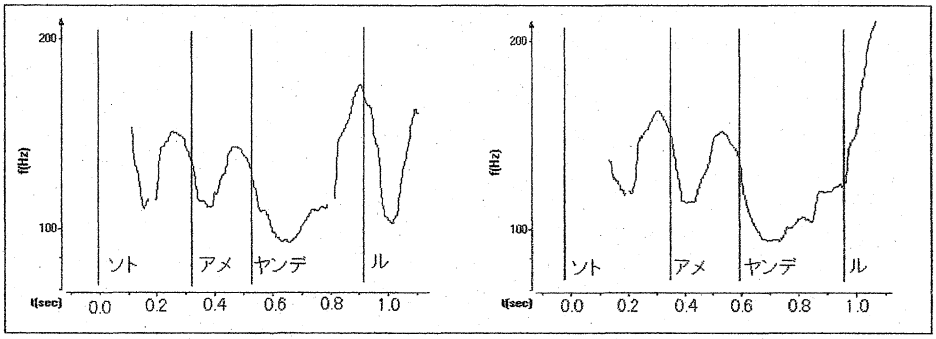

図4-1　疑問汎用型の「外、雨ヤンデル‿↘↗」　図4-2　問い返し専用型の「外、雨ヤンデル_↗」

この場合、述語部にいたるまでの文中のイントネーションは、どちらのパターンであっても、それによって上下動のしかたが左右されることはなく、どちらも同じパターンをとりうる。この部分については別に議論をする必要があるが、文のフォーカスの置き方、あるいは統語構造などによって、述語部とは別にイントネーションパターンが決定されるものと考えられる。

2.3. 音声的な特徴の整理

以上、両パターンの音声的な特徴を概観した。それぞれに整理をすると次のようになる。

a.) 疑問汎用型

一語文の場合は文頭から、複数の語からなる文の場合は述語部の開始点から始まっ

て文末の手前までの間に高くなり、そのあと文末で一度下がってから上昇調をとる。

b.）問い返し専用型

一語文の場合は文頭から、複数の語からなる文の場合は述語部の開始点から、ずっと音が低いまま推移し、文末で上昇調をとる

ところで、白岩（2009）で記述したとおり、福島方言においては、話し手と聞き手の間に情報量の差が見込まれる場合には文末で上昇調のイントネーションパターンが生起する。つまり、情報量が「話し手＜聞き手」と想定される疑問文の場合、基本的に上昇調が生起する（独話的な場合、反語などはのぞく。白岩 2009 参照）。本稿であつかう 2 つのパターンも、上記のとおり、文末より前の部分（一語文の文頭、あるいは述語部の開始点）から規定されるものだが、文末で上昇調をとる点は共通している。つまり、両パターンともに、文末で上昇調をとる疑問文のイントネーションパターンの一類型と位置づけることができる。ただし、本稿はあくまで「問い返し」であらわれる 2 パターンの意味記述を論点としたものであり、上昇調をとる疑問文一般について論じることはしない。

3. 意味的特徴

本節では、各パターンの意味的な特徴を分析する。まずは、問い返し以外の疑問文の場合について簡単にふれ、「疑問汎用型」が問い返し以外の疑問文一般でも使用されることを示す（3.1 節）。その後、問い返しの場合に論点をしぼり、両パターンの基本的意味を示し（3.2 節）、標準語の問い返し疑問について指摘されていることを援用して両者の特徴づけをより明確にする（3.3 節）。また、「問い返し専用型」が持つ「意外さ」という語用論的な含みについてふれる（3.4 節）。

3.1. 問い返し以外の疑問文の場合

ここでは、問い返しの場合について考える前に、それ以外の疑問文一般の場合について述べる。1 節で両パターンの名づけに際してふれたとおり、「疑問汎用型」は疑問文一般で用いることができる。一方、「問い返し専用型」は問い返し以外の疑問文では生起しない。

(5)（独話で）

あれ、雨音がしてきたな。外は｛アメガ‿↘↗／#アメガ_↗｝（雨か？）

(6)（外から友人が帰ってきた）

あ、濡れてるね。外は｛アメ‿↘↗／#アメ_↗｝

(7)（味の素がどこにあるか一人で探している）

うーん、味の素｛ドゴダ‿↘↗／#ドゴダ_↗｝（どこだ？）

(8)（母親に尋ねて）

お母さん、味の素｛ドゴ‿↘↗／#ドゴ_↗｝

明日のキャンプで使うんだけど。

以上の典型的な疑問文のほか、いわゆる確認要求・同意要求の文でも、「疑問汎用型」のパターンは生起する。

(9) うちのクラスに紺野って｛イダベ‿↘↗／#イダベ_↗｝（いただろう？）

あいつがさ‥‥

(10) この部屋 {サミグネ‿↘↗/#サミグネ_↗} (寒くない?)

暖房つけてもいいかな。

一方、「問い返し」という文脈では、両パターンとも使用が可能になる。

(11) (A と B は友人どうし。A が外から帰ってきた)

A:外、雨降ってきたよ。

B:え? {アメ‿↘↗/アメ_↗} (=1)

(12) 母親:味の素なら台所にあるよ。

息子:{ドゴ‿↘↗/ドゴ_↗}

以上、名づけに反映させたとおり、「疑問汎用型」は疑問文一般に使用できるパターンで、「問い返し専用型」は問い返しの場合にのみ使われるパターンであることを示した。このような、そもそもの使用環境の違いは、次節以降で述べる意味的な特徴と関わっている。

3.2. 基本的意味

3.1 節では疑問文一般の場合について述べたが、ここからは問い返しの場合にかぎった議論をおこなう。本節では、まず両者の基本的意味を示す。

あらかじめ 1 節で端的に述べたが、(13) のように、相手の発話内容そのものは理解したうえで「雨が降っているかどうか」という事実を改めて確認する場合には「疑問汎用型」が生起する (3.4 節で後述するとおり、「意外さ」を特に示したい場合には「問い返し専用型」もストラテジックに生起しうるが、ここでは「意外さ」は考慮しないことにする)。

(13) (A と B は友達どうし。A が外から帰ってきた)

A:外、雨降ってきたよ。

B:{アメ‿↘↗/#アメ_↗}

それにしては窓の外が明るいんじゃないか? (=2)

一方、そもそも相手が何を言ったのか聞き取れないような場合には「問い返し専用型」が生起する。

(14) (A と B は友人同士。A が外から帰ってきた。B は部屋で掃除機をかけている)

A:外、雨降ってきたよ。

B:{#アメ‿↘↗/アメ_↗}

悪い。よく聞こえなかった。 (=3)

また、以下に掲げる例のうち、(15) のように「黒木が発表するかどうか」を尋ねる場合には「疑問汎用型」が使用され、(16) のように「相手が言った『黒木』とは何者か」を問題にする場合には「問い返し専用型」が使用される。

(15) (A と B はともに黒木の友人)

A:今度の方言研究会では黒木さんが発表するらしいよ。

B:え、{クロキ‿↘↗/#クロキ_↗}

あいつ、本当に発表するのか。

A:うん、面白いことになりそうだね。

(16)（A は黒木の友人だが、B は黒木のことを知らない）

A：今度の方言研究会では黒木さんが発表するらしいよ。

B：え、{#クロキ‾↘↗／クロキ_↗}

いったい誰だそいつは。

A：あ、黒木さんっていうのは古典語が専門の人なんだけど、‥‥

つまり、「疑問汎用型」の場合、相手の発話そのものは理解したうえでその事実をあらためて確かめることになる。一方、「問い返し専用型」の場合、相手の発話がそのまま理解できないために、発話のなかの引っかかった箇所について言い直しや注釈を求めることになる。つまり、「お前の発話に含まれる『アメ』／『クロキ』という語について疑問があるから説明をしてほしい」という態度で、相手の発したことばそのものに対するメタ言語的なレベルでの疑問を示すことになる。ここから、本稿では両イントネーションパターンの基本的な意味特徴を次のように考える。

(17)「疑問汎用型（‾↘↗）」の基本的意味

相手の発話そのものは理解したうえで、事実（現実世界のことがら）について改めて問い返していることを示す

(18)「問い返し専用型（_↗）」の基本的意味

相手の発話がそのままでは理解できず、相手の発した言語表現そのものについての、メタ言語的なレベルでの問い返しをおこなっていることを示す

3.3 節で詳しく議論するが、問い返しの類型に、現実世界のコトガラを問うものと相手発話の言語表現そのものを問題にするものの 2 つが認められることは、標準語を対象とした安達（1989）でも指摘がなされている。福島方言の場合、この 2 つの類型がイントネーションによって区別されているということになる。

なお、問い返し以外の文脈における疑問文ではメタ言語的な問いかけは成立しえず、現実世界の事実そのものしか疑問の対象になりえない。3.1 節の記述をふまえて考えると、「疑問汎用型」は、そもそも現実世界の事実を問題にした疑問文一般で用いられるイントネーションパターンであり、それが問い返しの場合にも使われるにすぎないと位置づけることができる。

以下では、さらに例を挙げ、(17)（18）で掲げた基本的意味について検証をおこなう。(19) のような文脈では、両パターンともに生起しうるが、どちらのパターンをとるかによって、発話の意図は異なる。

(19)（親子で日本酒を飲んでいる）

息子：これ、どこの酒？

父親：会津の酒だ。

息子：{ドゴ‾↘↗／ドゴ_↗}　（どこ？）

「疑問汎用型」の場合、父親の発話自体は聞いて理解したうえで「どこ？」と尋ねることになる。したがって、「ドゴ‾↘↗」という発話は、「会津ということはわかった。会津のどこか？」という意図の問いかけと解釈される（その意味では「問い返し」というより一般の疑問文である）。一方、「問い返し専用型」の場合、父親の発話そのものがよく理解でき

ずに「どこ？」と尋ねることになる。したがって、「ドゴ＿↗」という発話は「今の発話がよくわからなかった。どこの酒か？」という意図での問いかけになる。このように問いかけの意図が異なるため、息子の問い返しに対する父親の答えも違ったものになる[5)]。

(20) 息子：これ、どこの酒？
父親：会津の酒だ。
息子：ドゴ‿↘↗
父親：若松だ。会津の若松だな。

(21) 息子：これ、どこの酒？
父親：会津の酒だ。
息子：ドゴ＿↗
父親：会津だ。会津の酒だ。

また、聞き手がいない独話状況であっても、文字あるいは記号による情報を受けつつ、その意味するところが分からない場合には、「問い返し専用型」による発話がなされる。

(22) (新聞の天気欄に「霙」と書いてあるが、何と読むのか分からない)
{#ミゾレ‿↘↗／ミゾレ＿↗}　よくわからないや。

(23) (信号が青に変わったようだが、西日が逆光になってよく見えない)
{#アオガ‿↘↗／アオガ＿↗}　(青か？)

この場合、新聞の「霙」という文字や信号の青色という記号が言語情報に相当するものであり、その意味するところが何か、メタ的なレベルでの疑問を表しているものと考えられる。独話状況なので典型的な問い返しとはいえないが、記号化された情報を受けての疑問ということで問い返しの一類型とみることができるであろう（独話状況でも看板や本に対しての「問い返し」がありうることは近藤 2001 が指摘している)。

3.3. 標準語の問い返し研究と比較して

ここまで、両パターンの基本的な違いについて議論をおこなったが、先にふれたとおり、問い返しに 2 つの類型が認められることは、標準語を対象とした安達（1989）でも指摘されている。つまり、イントネーションとは無関係のあくまで意味論的な議論であるが、問い返し疑問には現実世界のコトガラを問うものと相手発話の言語表現そのものを問題にするものの 2 類型が認められ、それぞれにふるまいを異にするというのである。これは、本稿にいう「疑問汎用型」「問い返し専用型」の別に相当する。ここでは、そのような標準語での記述を援用することで、両パターンの違いをさらに明確にする。

3.3.1. ダイクシス変換について

標準語の問い返しに 2 つの類型を認める安達（1989）によれば、「直前発話のコトガラ的意味内容を問題にする問い返し疑問（p.35)」では（24）のようにダイクシスの変換（「う

5) (20)(21)は、筆者が自身の父親に対して両パターンでの問い返しをおこなって得た実例をもとにしている。

ち」から「お宅」へ）が起こり、「直前発話の意味に踏み込むことなく、そこで用いられた表現を問題にするような場合（p.35）」には（25）のように変換が起こらない（「うち」のまま）としている。

（24）話者A「うちの息子が、昨日、熱を出しましてね」
　　話者B「{お宅の息子さんが？／＊うちの息子が？} それは大変でしたね」

（25）話者A「うちの息子が、昨日、熱を出しましてね」
　　話者B「{＊お宅の息子さん？／うちの息子？}あなた息子さんがいるんですか」

（安達1989:34より、語形の並び順を変えて引用）

安達をはじめとして標準語の問い返し疑問研究ではイントネーション面の指摘はないが、3.2節で示したように、福島方言では、「コトガラ的意味内容」を問題にするときは「疑問汎用型」、言語表現そのものを問題にするときは「問い返し専用型」が生起し、両者はイントネーションによって明確に区別される。そして、この対応関係から予想されるように、「疑問汎用型」の問い返しではダイクシス変換が起こり、「問い返し専用型」の問い返しではダイクシス変換が起こらない。

（26）A：うちの息子が、昨日、熱を出してね
　　B：{お前のムスコガ‿↘↗／#うちのムスコガ‿↘↗}

（27）A：うちの息子が、昨日、熱を出してね
　　B：{#お前のムスコガ_↗／うちのムスコガ_↗}

安達は両者の違いを文脈から示しているが、福島方言の場合、文脈の支えがなくとも、両者の違いはイントネーションという形式的な面から明確に区別され、イントネーションパターンごとにダイクシス変換の面で異なるふるまいが観察される。

3.3.2.　「主題制約」について

安達は、「主題制約」として、「コトガラ的意味」の問い返しでは相手の発話に含まれる主題の「ハ」が「ガ」に変換される（例文28）のに対し、言語表現そのものを問題にする場合、変換が起こらない（例文29）とする（ただし、対比を表す「ハ」についてはこのかぎりでない）。

（28）話者A「太郎はもう行っちゃったよ」
　　話者B「{太郎が？／??太郎は？} 本当かい」

（29）話者A「お前は怠け者だな」
　　話者B「{＊お前が？／お前は？} 気安い言い方、止めてくれよ」

（安達1989:35;37より、語形の並び順を変えて引用）

これについては、前者は「コトガラ」に踏み込むため、話し手の捉え方として主題が一度リセットされるが、後者は言語表現としての相手の発話を単に繰り返すもののため、「ハ」がそのまま写し取られるものと解釈される。

この事象についてもダイクシス変換と同様で、福島方言で「コトガラ的意味」の問い返しを表す「疑問汎用型」の場合「ハ」から「ガ」への変換が起こるが、言語表現自体についての問い返しを表す「問い返し専用型」ではその変換が起こらない。やはり、文脈の支

えを抜きにしても、イントネーションパターンごとのふるまいの違いは明確に示される。

(30) A：太郎はもう行っちゃったよ。
　　B：{タローガ‾↘↗／#タローワ‾↘↗}

(31) A：太郎はもう行っちゃったよ。
　　B：{#タローガ_↗／タローワ_↗}

3.3.3. 話法との関連

問い返し疑問文は、相手の発話内容を引き写すという点で引用表現としての性格を持っているが、上述のダイクシス変換および「主題制約」に関連して、安達は「コトガラ的意味」の問い返しが間接話法的、言語表現そのものについての問い返しが直接話法的であることを示唆している。これと同様、福島方言の場合も、「疑問汎用型」による問い返しは間接話法的であり、「問い返し専用型」による問い返しは直接話法的であると考えられる。

つまり、「疑問汎用型」で「コトガラ的な意味」について問いかける場合、相手の発話内容自体は理解したうえで、その「コトガラ」を自分のことばで表現することになり、そのためにダイクシスの変換や「ハ」から「ガ」への変換が起こる。一方、「問い返し専用型」で言語表現そのものについて問い返す場合、相手の発した言語表現がそのままの形で繰り返されることになり、その手の変換は起こらない。

以上、福島方言に関する本稿の記述は、安達（1989）における標準語の記述と平行して考えることができる。このような両パターンの特徴は、3.2 節で提示した基本的意味に合致したものである。

なお、標準語の問い返しについては、現象描写文を疑問化できる（仁田 1987）、蓋然性判断の形式を疑問化できる（寺村 1984、森山 1989 など）といった、通常の疑問文にない特徴が指摘されている。

(32)（特に前文脈なく）#子どもが運動場で遊んでいる？

(33) A：子どもが運動場で遊んでいるよ。
　　B：子どもが運動場で遊んでいる？
　　（仁田 1987:185 の記述をもとに筆者が作例）

(34)（特に前文脈なく）#彼がどこへ行ったかもしれない。

(35) A：彼はあそこへ行ったかもしれないな
　　B：彼がどこへ行ったかもしれない？
　　（森山 1989:86 の記述をもとに筆者が作例）

福島方言の場合も同様で、(32)（34）のような疑問文は不自然だが、(33)（35）のように問い返しの文脈であれば適切になる。ただし、それは「問い返し専用型」のイントネーションにかぎられ、「疑問汎用型」による問い返しは許容されない。

(36) A：子どもが運動場で遊んでるよ。
　　B：子どもが運動場で {*アソンデル‾↘↗／アソンデル_↗}

(37) A：あいつ、あそこに行ったかもしれないな。
　　B：あいつ、あそこに {*イッタガモシンニ‾↘↗／イッタガモシンニ_↗}

（行ったかもしれない）

ここから、現象描写文および蓋然性判断形式の疑問化が許容されるのは、少なくとも福島方言の場合、その問い返し疑問文が直接話法的な引用として発話されるためであり、「疑問汎用型」で間接話法的な意図が示される場合にはそれが許されないことになる。

3.4. 「問い返し専用型」による「意外さ」の含み

ここでは、3.2節で見た基本的な意味とは別に、「問い返し専用型」のイントネーションパターンが「意外さ」という意味を語用論的に生じ、その「意外さ」をアピールするために使われることがあることを示す。

例えば、下の例の場合、たとえ「『大阪』の部分がよく聞き取れなかった」「『大阪』がどこにあるのか知らない」のように「大阪」という言語表現そのものを問題にする状況でなくとも、「問い返し専用型」の生起が自然なものになる。

（38）母親：あんた、大学はどこに行くか決めた？　東京？　仙台？
息子：いや、大阪。
母親：{オーサガ‾↘↗／オーサガ_↗}　なんで大阪になんか行くの？

この場合、母親は息子の大学の行き先として「東京」や「仙台」を想定していたものの、その想定とは裏腹に「大阪」という意外な行き先を告げられ、驚いている。そのため、「大阪」という言語表現に実際には注釈が必要なくとも、「問い返し専用型」で「今の発話がそのまま飲み込めない」という態度を示すことで、語用論的に「その事実は予想外であり、すぐには受けいれがたい」という「意外さ」を示している[6)]。このような「問い返し専用型」の例は、3.2節で示した基本的な意味に即してではなく、そこから語用論的に生み出される「意外さ」をアピールするために使用されたものと解釈される。

したがって、似たような対話場面であっても、息子の答えが母親の想定内であれば「問い返し専用型」は使用する動機づけがなく、文脈に合わないものになる（下の例文では、「騒音等で息子の発話がよく聞き取れなかった」というような文脈は想定しない）。

（39）母親：あんた、大学はどこに行くか決めた？　東京？　仙台？
息子：東京。
母親：{トーキョー‾↘↗／#トーキョー_↗}
それじゃあ、今度東京のおじさんが来たとき挨拶しておくから、
あとは勉強がんばりなさい。

また、3.3節で述べたとおり、間接話法的にダイクシス変換などの手続きをした場合、通

6）なお、問い返しが「意外さ」を含意しやすいということ自体については、標準語を対象にした近藤（2001）が指摘をしている。
また、「相手の発話が聞こえなかった」という態度で「意外さ」を表す現象は問い返しの場合にかぎらず起こりうる。
例）学生：先生、ようやく内定が取れました。4月から社会人です。
教員：お前は留年だ。
学生：え、今何ておっしゃいましたか？　留年ってどういうことですか？
（筆者による標準語の場合の作例）

常は「疑問汎用型」のパターンが生起するが、「意外さ」が含意される場合にかぎり、「問い返し専用型」も生起が許容される。

(40) A：4組の丹治さんって、五十嵐のことが好きなんだよな。
B：違うよ。丹治さんの好きな人はお前だよ。
A：ええっ、{オレ‿↘↗／オレ_↗}　【ダイクシス変換(お前→俺)】

(41) A：ホチキスの芯が切れたから、くさの文具に行ってくるよ。
B：くさのはつぶれたよ。
A：ええっ、{クサノガ‿↘↗／クサノガ_↗}　【「ハ」から「ガ」の変換】

以上のような「問い返し専用型」の使用は、3.2および3.3節で示した意味特徴とは食い違ったものにも見えるが、基本的意味から語用論的に生み出される「意外さ」をとりたてて示すためのストラテジックな使用として位置づけられる。

4. 話し手の「情報把握」に関わるイントネーション

ここまで、「問い返し」に関わる2つのイントネーションパターンについて記述をおこなってきたが、似たような文脈で図5のようなイントネーションパターンも使用されることがある。これは、文頭から音が低いまま推移し、文末で上昇下降調をとるものである。

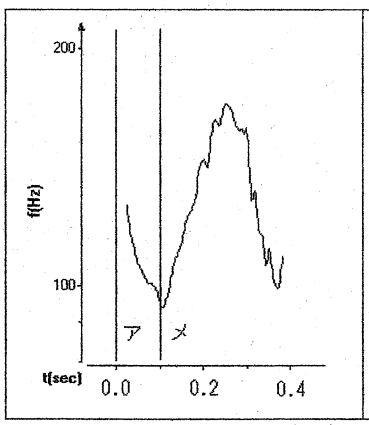

図5-1　「アメ_↬」の波形

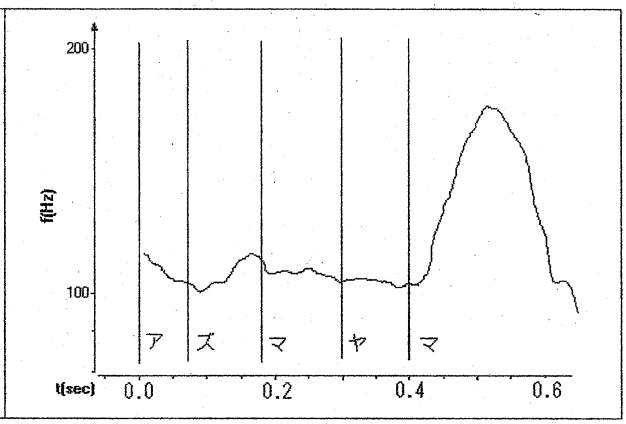

図5-2　「アズマヤマ_↬」の波形

以下の例文では_↬の記号で表すが、このパターンはここまで議論した2つのパターンと同じ文脈で使用されうる。

(42) A：外、雨降ってきたよ。
B：アメ‿↘↗／アメ_↗／アメ_↬
A：うん、雨。
だから、夕方からの花火は中止にしよう。

実際、福島近隣の栃木方言（同じ無型アクセント地域）を対象にした高丸・松田（2008）は、このパターンを「聞き返し疑問形」と名づけてその音響的な特性を記述している（上であつかった2パターンは議論の対象になっていない）。

しかし、このパターンは「問い返し」のイントネーションとは言いがたい。例えば、あくまで「問い返し」である「疑問汎用型」「問い返し専用型」のパターンは、(42) の「うん、雨。」のような相手の返答を要求することになるが、このパターンの場合、特に返答を要求するわけでなく、相手は明確な返答をせずに自分の話を続けてもよい。

(43) A：外、雨降ってきたよ。
B：?アメ‾↘↗／?アメ_↗／アメ_↬
A：だから、夕方からの花火は中止にしよう。

このような特性を考えると、このパターンは「問い返し」ではなく、単に相手の発話に含まれる情報を了解したという話し手の「情報把握」を表すイントネーションではないかと考えられる。

このことは以下のような例でより顕著である。つまり、このパターンは、相手から与えられた情報を了解したことのアピールとして、復唱をする場面でも用いられる。

(44) A：こんどお前のうちに荷物を送るから住所を教えてくれないか。
B：わかった。今から言うよ。福島市、
A：フクシマシ_↬
B：大森、
A：オーモリ_↬
B：3 丁目の、
A：サンチョーメノー_↬
(後略)

一方、本稿で「問い返し」として議論した 2 パターンは、あくまで「問い返し」という問いかけの文であるため、単なる復唱ではなく、やはり相手の返答を要求することになる。

(45) A：こんどお前のうちに荷物を送るから住所を教えてくれないか。
B：わかった。今から言うよ。福島市、
A：フクシマシ‾↘↗／フクシマシ_↗
B：うん。福島市で間違いないよ。

以上、「問い返し」と似た文脈で用いられる「情報把握」のイントネーションについて若干の補足をおこなった。このパターンは、相手の発話に含まれる情報をきちんと把握したことのアピールとして使われるが、(42) のように、相手がそのアピールに応じて返答した場合、「問い返し」と同じ発話の連鎖が実現される。そのため、一見「問い返し」の意味で使われているようにも見えるが、必ずしも相手の返答が求められるわけではないため、本質的に「問い返し」の意味を持つイントネーションパターンとは言いがたい。

5. まとめ

本稿では、福島方言の問い返し疑問文が 2 種類のイントネーションパターンをとることを示し、それぞれの音声的な特徴をふまえたうえで、その意味的な違いを記述した。以下にその記述をまとめる。

2 つのパターンのうち、片方は問い返し以外の疑問文でも使用されるものであり（＝疑

問汎用型)、片方は問い返しの場合にのみ使用されるものである（＝問い返し専用型：3.1節)。両イントネーションパターンの音声的な特徴は次のようにまとめられる（2節)。

a.）疑問汎用型

一語文の場合は文頭から、複数の語からなる文の場合は述語部の開始点から始まって文末の手前までの間に高くなり、そのあと文末で一度下がってから上昇調をとる。

b.）問い返し専用型

一語文の場合は文頭から、複数の語からなる文の場合は述語部の開始点から、ずっと音が低いまま推移し、文末で上昇調をとる

また、両パターンによって表される話し手の発話意図の違いは、次のようにまとめることができる（3.2節)。

(46)「疑問汎用型（⁀↘↗)」の基本的意味

相手の発話そのものは理解したうえで、事実（現実世界のことがら）について改めて問い返していることを示す　　(＝17)

(47)「問い返し専用型（＿↗)」の基本的意味

相手の発話がそのままでは理解できず、相手の発した言語表現そのものについての、メタ言語的なレベルでの問い返しをおこなっていることを示す　　(＝18)

「疑問汎用型」のイントネーションは、疑問文一般で使うことができるイントネーションパターンが問い返しの文脈にも使われているということになる。

このような2つの区別は、意味的な面からは標準語研究でも指摘されているが（安達1989)、相手の発話を自分のことばに直すという間接話法的な性格は「疑問汎用型」の問い返し疑問文に、相手の発話をそのまま引き写すという直接話法的な性格は「問い返し専用型」の問い返し疑問文に認められる（3.3節)。また、「問い返し専用型」は「相手の発話がそのまま理解できない」という態度を示すことで語用論的に話し手にとっての「意外さ」を含意しやすく、「意外さ」を表す場合であれば広く用いることができる（3.4節)。

なお、この2パターンのほかに「問い返し」に似た文脈で使われるイントネーションパターン（文頭から音が低く推移して文末で上昇下降調をとるもの）が存在するが、このパターンが意味するのは相手の発話にふくまれる情報を把握したことのアピールであり、相手の返答を求めなかったり、復唱場面で使われたりするなど、「問い返し」とは本質的な性格が異なる（4節)。

以上、福島方言における問い返し疑問文について、イントネーションの違いから2つの異なるタイプを設定して記述をおこなった。福島方言のイントネーションについては白岩（2008;2009）で文末部の意味記述をおこなっているが、いまだ明らかでない点は多い。今後、他の事象について分析を深めることで本稿の記述にも修正を加える必要が出てくる可能性もあるが、現時点では、問い返し疑問文に関する現象面の整理として本稿を提示することにする。

なお、標準語の場合、意味論的なレベルなら3.3節で見た安達（1989）の議論があり、問い返し疑問に2つのタイプが認められているが、それが音声面でどう反映されているのかについては指摘がないようである。標準語の場合、語に固有のアクセント型が存在する

ため、無型アクセントの福島方言のように複数のイントネーションパターンをとることがない、あるいは複数のパターンをとっていたとしてもアクセントによる音の上下動と重なるために観察しにくいのかもしれない。これはひとつの関心事であるが、筆者は標準語（および東京方言）のイントネーションについて正確に内省することができないため、議論はおくことにする。

【付記】
本稿をなすにあたっては、土曜ことばの会、および近畿音声言語研究会の例会で有益なコメントをいただいた。ここに謝意を記したい。

【参考文献】

安達太郎（1989）「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』8-8.
菅野宏（1982）「12　福島県の方言」『講座方言学 4　－北海道・東北地方の方言－』国書刊行会.
近藤研至（2001）「「意外である」ということと「問い返し疑問」について」『言語と文化』14, 文教大学言語文化研究所.
白岩広行（2008）「福島方言の上昇下降調　―文末イントネーションの意味記述―」『音声言語 VI』近畿音声言語研究会.
――――（2009）「福島方言の文末イントネーション　―意味的な記述への視点―」『日本方言研究会第 88 回研究発表会発表原稿集』pp.35-42.
高丸圭一・松田勇一（2008）「栃木方言における聞き返し疑問形のイントネーションのモデル化」『宇都宮共和大学論叢』9.
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.
仁田義雄（1987）「日本語疑問表現の諸相」小泉保教授還暦記念論文集編集委員会編『言語学の視界』大学書林.
森山卓郎（1989）「内容判断の一貫性の原則」益岡隆志・仁田義雄編『日本語のモダリティ』くろしお出版.

しらいわ　ひろゆき（大阪大学大学院生）
shira2940@gmail.com